

【暗証聖句】

【日・あらゆる罪の始まり】

イザヤ書 14 章 12～14 節「ああ、お前は天から落ちた。明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされた。もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登っていと高き者のようになろう」と。」

なぜ、完全な愛の世界であるはずの天において、罪が発生したのか。これは私たちにとって理解しがたい謎です。いや、私たちだけでなく、宇宙全体における謎であり、関心事となっています。聖書の中からわかることは、最高の地位にいた天使ルシファーによって罪がもたらされたということ。そのときのルシファーは、「わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登っていと高き者のようになろう」と思ったと書かれてあります。人類のあけぼの上 P4, 5には、次のように解説してあります。

「彼は、天の軍勢にまさる大いなるほまれを受けていたが、自分の地位に満足しないで、創造主だけに向けられなければならない尊敬を受けたいと望むようになった。彼は、神をすべての被造物の愛と忠誠を受ける最高のかたとするかわりに、自分で彼らの崇敬と忠誠を受けようと努めた。そして、この天使のかしらは、無限の父である神がみ子にお与えになった栄光をほしがり、ただキリストだけが持っておられた力を自分のものにしようと熱望した。」

ルシファーは地位や名誉に対して異常なほど貪欲であり、高慢で、神様ではなく自分が栄光を受けることを望みました。このような思いが罪の始まりとなっていったのでした。わたしたちも同じような思いを抱くとき、それは悪魔の精神を反映していることを知る必要があります。主にささげることの大切さを学ぶにあたっては、この貪欲さが大きな問題となってしまいます。貪欲に関して聖書は次のように言います。

エフェソ 5 章 5 節「すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。」

コロサイ 3 章 5 節「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。」

聖書は、貪欲な者は神の国を受け継ぐことができないと言います。それは貪欲が偶像礼拝に他ならない、つまりお金や物が偶像となってしまうからです。

【月・宿営地での忌まわしい出来事】

ヨシュアに率いられ、神様の奇跡によってエリコの町を陥落させた直後のこと、ある一つの事件が発生します。神様に対する裏切り行為と言っても良いかもしれません。主は、町を滅ぼし尽くさなければならない。そして、「滅ぼし尽くすべきものを欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ」(ヨシュア 6:18)と言われました。それなのに、「イスラエルの人々は、滅ぼし尽くしてささげるべきことに対して不誠実で・・・特にユダ族のアカンは、滅ぼし尽くしてささげるべきものの一部を盗み取った」(ヨシュア記 7 章 01 節)と記されています。主はそれによってイスラエルの人々に対して激しく憤られます。ウクライナに侵攻したロシア兵士が、金目のものを盗んでいることがニュースで時々流れますが、戦利品を盗むというのは戦争につきものです。しかし、主はエリコの町を滅ぼしても、戦利品を欲しがらないように気をつけなさいと念を押しておられたのです。主は人々の欲望を満たすために戦ってくださったのではないからです。ただ、主は約束された土地を与えるために、そして主こそ神であることを知り、主に栄光を帰すために主は戦ってくださり、勝利をもたらしてくださったのです。エリコの町の金や銀はすべて主の聖なるものであり、それらは主の宝物倉に納めなければなりません。それなのに、滅ぼし尽くすべきものを欲しがり、かすめ取るものが出てきたのです。それがアカンでした。誰にもばれないと思ったのでしょうか、神様にはつつぬけでした。そしてこのアカンのせいで、本来楽勝であったはずのアイでの戦いに敗北を帰してしまうのでした。サタンと直結する欲望を抑えられなかった結果、悲劇が民全体を襲うことになったのでした。私たちが主のもののかすめ取らないように注意しなければなりません。すべて神様につつまぬけであることを忘れないようにしましょう。

【火・ユダの心】

聖書の中で最も悲劇的な物語は、ユダの物語でしょう。それはイエス様といつも、一番そば近くにいながら正しい道を歩み切れず、主を裏切ることになってしまったからです。各時代の希望下 P216に、「主はユダを 12 人の弟子の中にお入れになった。主

はユダが伝道者としての働きをするものと信頼された。主は病院をいやし、悪鬼を追い出す力をユダにおさずけになった。しかし、ユダはキリストにまったく従いきるところまで行かなかった」と書かれてあります。キリストに従うという点において、他の弟子とは異なり、ユダは「完全に従う」というところまでは行かなかったというのです。何が完全な献身の思い妨げたのでしょうか。その一つが、欲望でした。普段はそれを隠しながらいたのですが、マリヤが高価なナルドの香油をイエス様の足にそそいだ時、それが露呈しました。ユダはこう言いました。

「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか」(ヨハネ 12 章 5 節)

一見、正しいことを言っているようですが、ユダは決して貧しい人を助けたいと思ってそう言っているわけではなく、ただいかにも正論と見えるような意見を述べているに過ぎません。しかもユダ自身、そのように生きていないのに、マリヤにそれを要求しているのです。ヨハネはこう続けます。

「彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっているが、その中身をごまかしていたからである」(ヨハネ 12 章 6 節)

人は、自分が出来ない正しい行為をしている人を見ると、それを批判したくなるものです。マリヤはイエス様にすべてをささげました。心からささげました。イエス様はそのマリヤの心を受け止められました。しかし、ユダにはそれができませんでした。主に一部をささげることはできても、マリヤのように損得を考えず、ささげつくすことはできない人だったのです。それがために、完全に主に従うということもできなかったのです。

### 【水・アナニアとサフィラ】

使徒言行録 4 章 34、35 節

「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。」

初代教会は何でも分け合うという精神が生きづいていました。そのため貧しい人がいないほどだったと聖書は言います。皆が霊的家族として生活していたのです。キリストの教えがまさに繁栄された理想的な状態でした。ところが、そのような素晴らしい状態の中で、実にショッキングな出来事が発生してしまうのです。アナニアとサフィラの物語です。

使徒言行録 5 章 1、2 節「ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、妻も承知のうえで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。」

二人は自分の土地を売って、教会にささげました。それは素晴らしいことでした。ところが、ささげたお金を、土地を売った全額だ嘘をついてささげたのです。すべてをご存じである主は、その場で二人を打たれ、二人はそこで死んでしまいます。人を欺くことはできても、主を欺くことはできないのです。しかし、二人はなぜこのような嘘をついたのでしょうか。現金を手になると、急にすべてをささげるのが惜しくなったのかもしれませんが、けれども、そもそも彼らは別に土地を売ってささげる必要などなかったのです。あるいはささげるにしても正直に土地を売った一部ですとってささげれば問題なかったのです。自分たちは良い人だと印象付けたかったのでしょうか。自分たちに栄光を帰したかったのでしょうか。このような精神もサタンと同じなのです。

### 【木・食欲に勝利する】

コリント手紙一 10 章 13 節「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずですが。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」

今週学んだ人たちは、決して酷い悪人というわけではありません。ただ金銭に関して弱さを抱えていたというだけです。それは誰の心にもあるものではないでしょうか。では、私たちはどうしたら、この欲望に勝利することができるのでしょうか。この問題は簡単ではありません。同じ弱さを覚えているなら、努力して克服しようとするのではなく、「人にはできないが、神には何でもできる」と言われたイエス様の言葉を思い出し、すべてを主に委ねていくことが大切なのです。

また聖書は、どんな問題でも、主が必ず逃れる道を用意して下さっていると約束しています。その逃れる道こそ、イエス・キリストです。だから、イエス様にすべてをゆだねるしか方法はないのです。ただ、本気で主に委ねないと、なかなか問題は解決しません。一步一步、主に委ねることを学びつつ、正しい道を歩んでいきたいと思えます。